

通航一覽

六

庫	文	閣	内
一 八 函	二 大 冊	三 五 三 八 號	和 書 類

139
閣

内閣文庫	
番號	和 35381
冊數	26 (6)
函號	178 444

男

共廿冊



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



八

通紙一覽表
松林園抄本
五三〇

八
圖139

通航一覽卷之六

琉球國部六

目錄

一 來貢 慶安二年
兼惠二年

通航一覽卷之六

琉球國部六



来頁 慶安二年
兼意二年



慶安二己丑年七月十日琉球人の江戸よ

志以同十四日松平治津藩摩多光久の

許よ上使として大目付井上筑後守

政重ををいすれかの糖米として二子

俵を廻る。寛永正保、夜初米の記載、瀬く、兼寛難、寛永

七年、糸府の附古米のこと、こゝに俵下さりとあり

藝討を謝し奉るまゝ二丸よふて
殿有院殿も洋湯に自己の拝礼等
申して前規よ承せらる。

慶安二年九月初日

一琉球国中山王尚質使若久志川王子宅城

中山王御目し口礼也松平薩摩守下屋敷

按此より今の芝
屋敷をいかり通町筋中町通常益楊入大目

下馬止道中列し次身不謂

一歩引く者十人 自注薩
摩守人

一むち持二人

一樂人十人

一旗持二人

一扱次二人

一士 自注府衣袴
芸薩列人

一歩引く者十二人 自注琉球人
下馬内三人

一具志川王子 自注屋
轉系

一 琉球騎馬

一 従者十七人 組小寺共

黄もちまうさ

唐装束

同 へんに

同 えち

同 ちか

同 あしぐさく

同 たあすせ

同 福さしぬ

同 かかくまき

同 かうち

同 あさし

同 こさう

同 あさし

同 小寺 おまひふ郎

同 海さふ郎

同
おとよひ六郎

同
おろし

同
おろし

同
まかへ

右に法没人志大女中馬腰しんしん重く馬上
十七人の右に所しん中馬しん久志川しん
あしん久志川しん紫お橋しん屋轆しんより
中安坊しん口流しん若河しん踏しん上しん玉しん前廣しん

依上意井上筑後守官城しん兼しん松しん孫しん又
右清しん令兼内殿上しん同下しん重しん十七人
同下しん同しん並しん重しん下官しん口しん玄しん関しん前しん座しん上しん
重しん

一大廣間出御自没御長長河河口口礼礼兵兵為為清清前前、、通
松平又三郎松平若若源源
中山中山五五より

一御右口

一腰自没系系

- 一 御馬代 根六十枚
- 一 古平布 百疋
- 一 綾芭蕉布 三十端
- 一 薄芭蕉布 三十端
- 一 久米綿 百把
- 一 丸枕蓑 一對
- 一 玉二枚打屏風 一双
- 一 燒酎 六壺

以上

但書簡書御前不出

歎願日記

慶安二年九月朔日琉球國王使若久志川王子
 山口中々々已ハ終日山口礼をうり来聘以大概如

先例

琉球來聘日記抄 出官日簿抄
 百年記 亦武編年要記

慶安二年九月朔日大廣同三琉球人山口礼代替也

五ノ礼其後自分ノ口礼也甲斐肥前右加人ノ縁

頼ニ云礼口右ノ内所ニ長濱也 頼ナリノ甲斐肥前
内所ノ及ノヤ洋ニ

以ラ

大納言極ノ二九ニ口礼也

口礼以全名氏ノ記

慶安二年九月朔日琉球人ノ目見候ノ法大名ニ

不也城但口藩代大名家ニ悉知仕以

寛明日記

同月二日かの使者日光光山より

包中以下を奉りてくる旨命せしむ

同十一日日光より卦く献儀あり歸府

の後同廿五日より一也城以口帳を

下され

大猷院殿

殿有院殿より御物ありて老中

豊後守忠秋より返簡を渡摩る光久

うぶ人下渡り

慶安二年九月琉球人日光一も糸川友河

對馬守右良長若狭守

按すりし對馬守重治ハ
在中若狭守ハ高家ナリ

此卷ハ

日光院全名氏ノ記

慶安二年九月二日河内對馬守水野俊俊

按す
りし

心養
若狭

友人琉球人ト云連日光一も糸川友河九日

河内對馬守日光一も糸川友河十一日琉球人日光

糸川友河一も糸川友河十一日琉球人

日光一も糸川友河十一日琉球人

日光一も糸川友河十一日琉球人

日光一も糸川友河十一日琉球人

後

日光一も糸川友河十一日琉球人

日光一も糸川友河十一日琉球人

寛明日記

北官日曆抄

慶安二年九月二日今度琉球人ト使若日光山ト

相續付之古良君使与河内對馬小笠原寺使与

按此のよ
四卷者番 水野彼後与文城被命与 按此のよ
大目付 此卷之

同廿六日琉球中山王使去久志川王子由順松平

又三節差添

中山王に 白浪五子使 屋風五双五巻之

久志川に 浪五百枚并附服五十五下之

中山王に 在中并松平和泉与より 按此のよ
中書与より

返簡松平薩摩与家来新納右膳門 招殿中河内

豊後与酒之

献廟日記

宛中返簡

芳翰披見欣然之至也琉球國繼日安堵

之事去年冬從薩摩守光久就申遣候使

者具志川到着為謝詞御祝儀進物之土

産如目錄令披見畢

大君幕下之處 御前江具志川被 召

出 御機嫌不斜委曲申含使者口上者
也不備

慶安二年九月廿三日

阿部對馬守

阿部豐後守

松平伊豆守

回答中山王館前

芳翰披見欣幸之至也琉球國繼目安堵
之旨去冬從薩摩守光久申遣候間爲謝

禮具志川參向祝儀進物如目錄令披露
畢

亞相君之處 御前江具志川被 召出

御機嫌快然委曲使者可有演說者也不
宣

慶安二年九月廿三日

松平和泉守

回答中山王館前

今度日光山

東照宮大權現寶前江以使者具志川令
 參宮捧物如其目錄被奉納候段敬崇
 之深志御感被思召者也不備

九月廿三日

阿部對馬守判

阿部豐後守判

松平伊豆守判

中山王館前

同上憲教教典

琉球献納紫洞燭其臺

總高廿九尺餘廣五尺一三寸六分

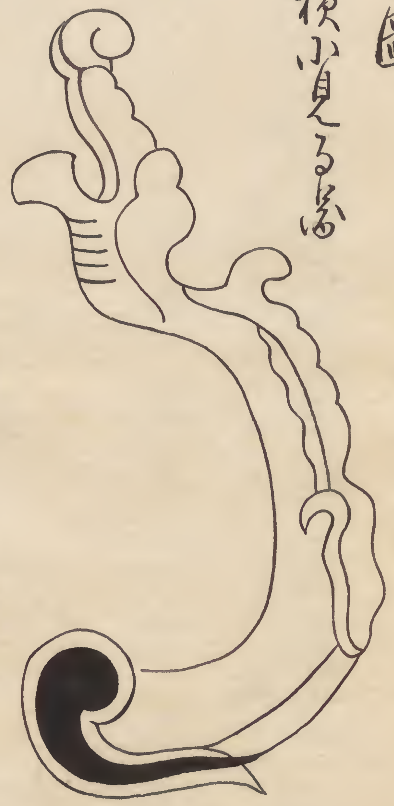
燭虫是ハツ



上ノ段之柱
 是より之段より一階ナリ
 柱は十一段廻小附あり

蜻足之圖

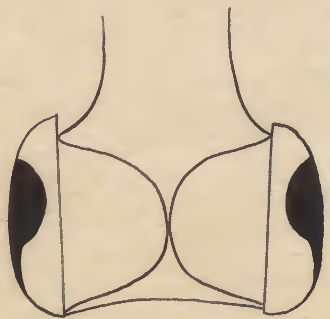
横小見たる處



背面之處



足裏



日光山志

兼應二癸巳年九月廿日琉球人江戸よ

系总以同廿二日上使を以て松平為津

少将光久慶安夜う許よ米子儀ハニ子儀と柄り

よりけとさる儀
其故詳あり同廿七日明日道筋見分のり

と先中より道筋のりよ連り

兼應二癸巳年九月廿日琉球人江戸よ来る

續武家評林

兼應二年九月廿二日兼松下儀抄さるよ
大目付为上使

松平大隅守方より朱子儀仗下是琉球人より中由
也

寛明日記

兼意二年九月廿七日道中より一巻中より以手
紙明日四段王子孫あり是道筋見廻り中封く逃
連く

琉球人來朝記

九月廿一日己辰刻

兼有院殿大廣間より出御中山王尚質
の使者國頭王子洋渴して御代替を
望し奉る少将光久及び嫡子薩摩守
徳久これに率由

兼意二年九月廿八日

一 今夜御代替として祝儀渡琉球國中山王尚質
献使者國頭王子頃日当地來是今日也據

一 松平大隅守事國頭先達也當此礼了中上

伍法等第

一 四段芝城道筋並列し次第

松平大隅守中屋敷より上屋敷とお城松平

この下屋敷とあるは今の芝屋敷上屋敷とあるは今の牽櫓
はつの中屋敷をいふなり其遷移せしは徳より後の事なり

（此はともなふ年
代今洋をいふ） 共より大谷小治河井瀬波も上屋

敷より前記より松平頼業も屋敷より前より通

か

歩ゆ者 廿人 自江松平大
隅守家来也

むち持 二人 自江疏
球人

旗持 四人 自江疏
球人

樂人 十二人 自江疏
球人

士 十人 自江大隅
守家来

四段王子屋轎に家僕後中馬より内へい
三人と列

馬より後者十人所謂

ひやんさ 法ものこ たまよりせ

ちたるゑ　　よりたる

此六人とも唐装束

こころゑ　　ら海人　　かうち

此三人は黄ももりまうさ

た海ぐまう

是ハ赤ももりまうさ

おのひ二郎　　海やま　　るるう

おのひうゑ　　まゝ二郎　　おひこく

此六人とも楽人也 自浪小童也

士後者サむち持ももり持等童子く外く樂
人とも右く雅ももり馬く大腰掛に重く馬上十
六人ハ下馬より歩行四段に各流四段を
宗お橋より屋簷を下口玄關板椽階之上に
至時前座より依作井上院後寺官城城
前寺兼松下院寺 自浪小童大目付 向令兼内殿上
回し下段に令各社後者十五人ハ同列次

間ニ总政下官ノ職ヲ以テ玄關ノ前庭上ニ
置ク

一 已刻四基書院御左馬頭殿 按此乃小甲府
總守御是也

右馬頭殿 按此乃小後河養君
常憲院殿也事之 明、河對顏酒井

雅樂殿 按此乃小
大老忠清 披露

一 大廣間御御 自江以系於此廊下以迎君之面
亦番頭御以等並居御目見 御上殿

御忌座 自江御
長清 牧野長門守 按此乃小
小姓
以て此座者なり 設

厚身二身敷ノ口海を敷合ノ御刀掛

空

御後山在ノ方大森佐濃ノ内庭筑後也

山右ノ方大久保丹波也安後彼後也何

惟 自江若口人
山守元也

一 松平大隅守同薩摩也一人宛沙礼雅樂殿

披露ノ別退去

一 雅樂殿瀆波也 按此乃小
大老忠晴 正ノ琉球ノ使者也

初ノ旨在御御依ノ筑後也越前也下総也

上等し、運付し、則三人殿上し、万より令業
内大廣間、中し、百束、安居、漆、西向、令致
云、大隅、高、薩摩、寺、列、在

一、琉球、玉、五、より、進、物

御、左、刀

一、腰

御、馬、代

銀、五、十、枚

赤、帯、香

十、箱

香、燭

十、箱

青、貝、香、箱

八

右、平、布

百、疋

綾、芭、蕉、布

三、十、端

落、芭、蕉、布

二、十、端

久、目、綿

百、把

玉、海、瓶

一、對

焼、耐

六、壺

以上

右進物は御所以前御所目通南へ板橋の如く
方より車勢の如く方へ向て並重し

一 雅樂以瀧波寺に召し國以王子に令致し礼
之有は作ぬし則て人國以へ上意の通傳し
國以王子安兵隊より三尊目上御被中
山王より献上し左刀月詠雅樂以持中
候し中央の重し披露國以譯礼別退左
刀月詠雅樂以引し早方は納戸接し内へ

入御

一 右進物に勝手の方へ引入し進物番長
誘致し次に國以以自分へ進物沙礼中上
次第

- 香幣香 六箱
- 香燭 六箱
- 練芭蕉布 十端
- 睡芭蕉布 六端

燒耐

二臺

右進出御前より車寄際に重く此下よりおく南板極御目通西の方より東の方へ並重く

一重の山納戸揃よりお御の上段御忌座
四段落お於板極に礼雅樂以披露し別
退去

一右の雅樂以讚波を以遠境來忌許す

献上し依所満悦に思召し旨に作出し

大隅の薩摩の此席に以事早に入御入
御前後進御入し治事右同

一筑後守銀前守下巻守令業内四段殿上
之間下段忌座

一雅樂以讚波を以重く大隅の
使者に白く令祈りし然る使者退去之人
く大目付に玄園階上と先連の送く
自返
包中

送ハ
云々

一 園臥王子ノ外一人も御前ニ不カ

一 依上云井伊掃部頭松平右羽守右長濤

云々大廣回西口極ニ祇候

一 以上云中大名以下並口藩代大名宅城

大廣回東ノ間ニ何候各長濤也此外御前

祇候ノ面々何長濤云々

一 御振舞云々茶湯ニ殿上ノ間不見所ニ

山登子重々

一 沙書院番口小姓組より二十人宛出入あり

波使者口廣間ニ不出以承より退去以

後口書院番口番番口加勤々

一 大御者よりお人百人是を病ノ間ニ祇候

一 彼使者大御下馬迄居お前一左右あり

官中何候ノ面々退去

一 大御下馬久世之口御

自江百人
組譜宛

勤番小笠原

右迎大夫 按此乃大夫子 形来惟お勤く琉球人

宅城之内に三日所勤く使者退去以後如

元右迎大夫形来へ渡り此外亦、清音不

及加音等は目録中に亦記す

一 下馬より松平頼宗と道筋板倉市正

猪子左吉史支組呂列く見也友人は歩仍

既也

一 今日古例月々山礼云

一 琉球國より書中と書簡差紙

琉球人來朝記

義意二年九月廿八日御代智為赤坂後琉

球國中山王使者國頭王子來朝書簡本書

近返共真字

大樹將軍家綱尊君當代御連續永年普

天同慶不過之候謹而差一价使伸萬萬

歳之祝儀委細可宜説候伏希以老大人

恩察達

尊聞惟幸恐惶不備

惟時慶安五年壬辰五月三日

中山王

尚質判

松平伊豆守殿

松平和泉守殿

阿部豐後守殿

令條記 法祿經綢

憲教教典

弟意二年九月廿八日琉球國使者出礼大廣

間也其友々松子正徳元年出礼之時替依

之々但殿上々間々々遠侍々御簾不掛殿

上々間上候々屏風々立切也

琉球人御礼次第

弟意二年九月廿八日琉球公使者出礼已

後刻大廣間々御御長灣御上候御簾掛

中一間卷揚々厚々々上御簾發々御簾座

御腰掛牧野長門守御叙々御腰掛掛書々

街上殿御在太人保丹波守安友後後守御右
大森伝濃守内友筑後守列居下殿御右方
縁二井伊掃部頭松平お明守祿候先達二
松平大隅守同薩摩守山礼次二琉球守五々
山左刀月録酒井雅樂頭披露二中殿上より
二翌日二山礼二洋退去進物引二進物と
出御前より並重二使者國頭王子自分献
上物御向拭縁二重二於回不山礼二洋退去

雅樂頭披露二早二回二山禮障子圍二山次
祿候二面二御目見入御

琉球來聘日記抄

十月十日女將光久琉球使を携へ
日光に針く寺社を以安友右承進
重長これに副二同女六日中山五尚質よ
上意賜物使者後者よ山脈賜物あり
早て御白書院出御波國樂を極せられ

樂人より編成之儀つゝ勅されり

音楽を命せられしは時

をさしめしは是より永く例とある樂人の賜わは後日在中より先久の家人より渡り

義應二年十月十日琉球人并松平藩摩多

寺社奉行安友右京進等日光より沙眼以下

今日發足

寛明日記 如官日誌抄

柳堂年表秘録 山本氏筆記

義應二年十月廿六日

一 今夜後琉球國之中山王尚質献使者回

以王子差被書簡御代智し沙祝儀存賀し

今日國以王子遣書簡於執事存賀

貴大君之嗣主今日口喉依可下下之旨

松平大隅守同藩摩多國以正連之已刻

宅城井上筑後守宮城被示之若松中總守

由玄園之階下迄如向殿上之同下候令

被示し

國以使者十五人殿上之同次ニ居

同是史云二人古山玄閣一前若堂一

一中山王尚質之贈遺之白銀六百枚若綿
六百把各十折右大廣間下後之並重之
山濤濤子圖之是傳上意之逸之山濤濤
子開之圖以之為之令見之地

一圖以維之下山脈依准擬附庸之使以也
御之酒并雅樂以酒并瀆波也松平
伊豆也河初量後也大廣間之二之間也

初席南向列在是圖以之為之傳作之逸也

井伊掃部以松平和泉也

按此乃山脈中之事

若下旁

保科肥後也之先以為山使依上洛也

概云

南之板榻より至于寢檢之間浩元英養也
山者大山者以山書院者以山小性組者以
英諾物以列居

一大隅也薩摩也筑後也中絶也殿上之間

より圓以之葉内大廣間二之間髪居際上
令波若く對老中一礼名會釋有く之老中
御進席上言く趣并白銀編等尚質上之
是く旨讚波与傳く御漢障子 自江福所開
跡跡所跡
之障不能く為圓以譯見く年之筑後与
令若若為く間上立退出漢障子圍く次
圓以之市中く白銀二百枚小袖女重名卷
南く方板極より持出く二之間髪居隔

一尋重く于時筑後与令若圖擲く圓以
初府到申亦必前進席右く通市中く旨
伊豆与漢車了く譯文年之為く間へ退右
市中物出車寄く方へ引出く
次圓以從敷敷申上而市中く白銀之百枚
く卷右持出く此夜与費居際之重く
年之筑後与令若若圓以初席退若敷申く
市中く旨述く年之為く間へ退去市中物

由車歩く方一引年之國政其如一孔殿
上へ回へ退

右夜毎之大隅之父子回政、若添上臺

く逃業く

一右之而午后刻御白書院出御

自江常く御
府衣袴○按

是よりこれより御常服のことくるれとも琉球東傳
日記抄より御建袴とあり其是非今交へる

御口

申多去儀之儀く

梅止るよ去儀之
ハハ小性より

沙上候云御

自江御府身御
御御口候より

一 大隅之薩摩之頃、出立に礼雅樂段扱

高之國政に暇御真柄より新有在存

趣潰波之序更之豊後之四換抄中上此

時大隅之薩摩之丁令奏被回之音楽之

旨也

一 次左馬段及右馬段及頃、お席雅樂段

扱高之是矣城之音楽丁有見分之旨儀

作也清對面卒之退去清連歌之同云云

但西之山極通山勝子之言より云云又

其方へ退去也

一 清白書院沙下候へ清初府

御座奉清傳清腰相掛云々但清初府

東向へ接へ

一 東へ沙津際子園へ沙麓下へ

一 南へ方々以山廣風相圍へ

一 山麓へ外流へ牧野佐渡子久世大初云

去屋但馬子内友初云云

按此云は山人
之は清初初云

友人

宛北面左右へ候

一 南へ山極通雅樂隊瀧波子伊豆云

豊後子母作

一 三へ同東南へ沙津子際へ高家へ面へ

諸元以奏者番大山者以列居

一 同山へ方諸者以諸初其外段人等群居

一三ノ回ノ東ノ口漢涼子園ノ白ノ角一々
朗用ノ是世朗ノリ樂人ノ其為テ令入也

樂ノ次第

一番 太平樂

太鼓

笛

ニツク

ひちア

思ひこく

思ひがな

たのう

かうち

名ヲ云ニテ奏ノ終ニ退

二番 万歳樂

たいこ

うり

ニツク

ひちア

没者右同

發微音唱歌但求舞樂

二番 雅楽

たいこ

思ひう

ろう

思ひうか

ニツク

たるう

ひちア

かうち

もんじやう

ま之郎

もんじやう

まやまご

右同断

樂者以上七人より七之夜共七人宛か

内六人き童子也

右早入御

一入御以後在中大廣間にお立於之之間

大隅守薩摩守四段上件ノ樂跡を思ふ

御氣色ノ御事也依ノ伶人ノ綿衣之宛

は下ノ旨也上意ノ趣雅樂段傳ノ

但依ノ下方ノ族即立不能頂戴述ニ

大隅守家来下波卷ノ由也

右邊之圓形退去筑後守頼宗守下總守
山玄園階下送之卷中送之

一右在下持お没入之進物者長袴之
勤之

一同年長之没入之水野槍之諸組之歩
之業勤之

但沙車分より山玄園之持お大隅守
頼宗にお渡之

一卷中其外お仕之面之長袴

一山書院者山小姓組之内よりお人合六十人

山書院者不本者にお加勤半袴

一大山者元百人為之同小之端群居半袴

一二九より山玄園之送不交之

一圓形宅城之通筋為巡見是幼小二郎去田
十左清之友組共之者之山歩之也

一同道筋條式等去月廿八日宅城之時不

和智

初、涉門番之覺

下馬

大手

二九

堀重門

中口

渡邊圖書

屋代城中

小栗又一席

近友宅之物

大久保荒之物

高田庄右邊門

朝鮮人來朝記附○按是乃渡邊圖書屋代城中書以百人組之臥
小栗又市人久保荒之物以口是弓以近友宅之物高田庄右邊門以
同諸宅
以之

嘉應二年十月廿六日

使者遠來書翰披讀被賀我

貴大君承繼前業琉球闔國被奉祝之其

懇款之志可以嘉焉使者捧土宜敷品登

城拜謁禮畢賜暇歸國所賜足下如目錄

可被領受之不宜

承應二年癸巳十月廿六日

阿部豊後守

忠秋判

松平伊豆守

信綱判

回答中山王館前

大存書松平和泉守依病氣加判云々

按す
羅山

文集載る所の四箇これと小矣
有り参考の爲姑く下よあ存以

別録

白銀

五千兩

綿

五百把

右所被遣於中山王者也

十月廿六日

右に返翰并目錄林道去案々等者大稿

長左清門

返翰箱寸法覺

一長一尺六寸

一 横四寸五分

一 高三寸

一 環浪 但紫灰

一 木相 但白木

一 緒紫 但言藤步

一 蓋 やううし
但ひらとめん

右書翰月詠共入る漬黄母二重服紗抽る
箱包る

同外家く覺

一 長一尺六寸五分

一 横六寸五分

一 高六寸三分

一 環洞 云地丸灰

一 緒口赤色茶

一 木相 白木

一 蓋 やううし
めんとら

一書翰紙間似合 長一尺二寸餘

一目錄紙 上同斷

右書籍若寸法之事為後年一記書之旨在中

依左圖記之

令條記
憲教教典

復琉球國主 自注代執政
承應二年十月

使者遙來書簡披誦賀我

貴大君相承前緒治平國家被奉祝之可

謂懇款之至也使者獻土產教種登城

拜謁禮畢賜暇歸國所贈賜足下如目錄

可被領受之不具

慶長年中以來琉球隸屬薩州故先是

來貢教回其書札皆用俗字諸執政回

簡亦不拘文章今載二篇於此 按此母年の

返簡より後 而各不悉録之琉球一名中山

國

嘉應二年十月廿六日琉球回使者由暇於
大廣間庄中初頂戴平之平刻白書院出街
沙才灣祇候之面、何も長湾松平大隅与
同薩摩与山礼平之間、漢濤子園、街藤
掛之重、上、沙湾教之街总座也、外
街左牧野佑波与内友本云与街右久在
大和与去屋但馬与列后南也極通、雅樂院

濱波与伊豆与豊後与並養者番浩元祇候
街向之方番頭由以波作于時大隅与薩摩与
おんたの、之管弦好与

古平樂、新歲樂、新來郎

右之番与

琉球東聘日記抄

嘉應二年十月廿六日琉球人、沙暇出
一銀三百枚綿三百把 中山王、下

按此より先の引書より二百枚
又百枚二百枚の誤りあり

一 銀二百枚 小袖十

一 銀三百枚

惣中

右に通り下於河白書院琉球人樂正作付
河上覽樂人七人河小袖三宛下

寛明日記

同三甲午年十月廿三日松平清津少将

光久より使者をよめて中山王尚質



りの献物を揃くこい去年糸府の
使者帰玉の山礼として薩摩玉よりて
使者を渡し献する取なり時を中よ
書依の性復あり

此は薩摩玉来
真の條あり

Faint, illegible text on the left page of an open book.

Faint, illegible text on the right page of an open book.

